



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リュボーフィ・ベズバフ『夜雨のささやき』（2021）
Author(s)	大谷, 梨乃
Citation	北方人文研究, 18, 241-246
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94495
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_12_241-246_Otani.pdf



リュボーフィ・ベズバフ『夜雨のささやき』（2021）

大谷梨乃
（北海道大学大学院文学院）

要旨

かつての日本領樺太を描いたロシア文学作品が、2021年にサハリンにて発表された。リュボーフィ・ベズバフ『夜雨のささやき』である。この作品は連作短編集となっており、日本人、アイヌやそのルーツをもつ人々、朝鮮人などを主な登場人物として、樺太の40年間を描き出している。登場人物の多様性とそれを描き出すことの限界、さらには樺太と故郷概念の関係性など、この作品は多くの示唆に富む。また、この作品を分析するにあたっては、他の文学作品とも比較することで、樺太社会における多様性や故郷概念に加え、現代において樺太を描き出す意義についても提示できる可能性がある。

「樺太」の時代の終焉から80年近くが経とうとしている。北海道稚内市からわずか40キロほど、晴れた日には市内からも海の向こうに見える島がかつて日本領であったことは、次第に人々の記憶から薄れ始めている。しかしながら近年、樺太時代を舞台にしたロシアの小説が現れた。リュボーフィ・ベズバフ『夜雨のささやき』（2021）¹⁾である。『夜雨のささやき』はユジノサハリンスク市立図書館の出版組織から発表された、9編からなる連作短編小説で、1905年から1945年の日本統治時代の樺太を描いた作品である。収録作品は順に、「イサミの聖なる仕事」、「夜雨のささやき」、「馬と刀の戦い」、「目に稲妻」、「叶った夢と叶わなかった夢」、「紙の火」、「うつ病治療薬」、「黒いあな」、「豊原最後の日々」である。それぞれの作品はところどころに連関が見られるため、長編小説として読むことも可能である。

ベズバフはサハリン州シャフチョルスク生まれで、現在はホルムスクに在住している。幼い頃にウグレゴルスク地区ウダルヌイ村の祖母を毎年訪ねており、そこで樺太時代の日本の遺構に魅了されたという²⁾。学生時代から小説を書いていた彼女はまず、『夜雨のささやき』の原型と考えられる『樺太庁』という日本領樺太時代の小説を創作した。この『樺太庁』は、詳細な歴史的・社会的背景の説明も加えつつ、日本統治時代の樺太に暮らした人々の運命を描き出している³⁾。これを加筆修

1) 本稿では以下の電子書籍を参照した。各タイトルと引用箇所については拙訳である。

Безбах Л. Шёпот ночного дождя. Ridero., 2023.

2) リュボーフィ・ベズバフについては以下を参照した。

Глушков А. Холмчанка Любовь Безбах стала победителем третьего сезона общероссийской литературной премии «Дальний Восток»

[<https://kholmsk.info/news/society/2021-12-30/holmchanka-lyubov-bezbah-stala-pobeditelem-tretiego-sezona-obscherossiyskoy-literaturnoy-premii-dalniy-vostok-327483>] (2024/6/30 閲覧).

正・再構成した『夜雨のささやき』で、ベズバフは全ロシア文学賞『極東』第3期の短編散文部門の最優秀賞を受賞した。『夜雨のささやき』は、それぞれの短編は独立しつつも、ほとんどの登場人物たちが何らかのかたちでつながっているため、同時に長編小説として読むことも可能になっている。

インタビューにてベズバフは、この小説を創作するに至った経緯を以下のように説明している。「私の若い頃は1990年代から2000年代で、まわりには荒廃のほか何も見当たらなかった。そして、サハリンには何も建設できない、まっとうな生活を築くことは不可能だと強く確信していた。2010年、私はサハリンの歴史における日本時代について知った。40年間で、日本人は島南部に製造所や工場や建設し、道路を整備し、海港を開き、産業を立ち上げた。サハリン南部は自給自足できるようになったのだ。私はこの発見をみんなと分かち合いたいと思い、そうしてこの時代を描いた小説が生まれた。目標を定めて働くことが必要だ、そうすればいたるところでまっとうな生活ができるだろう」⁴⁾。これを参照すれば、ベズバフはサハリンにおける日本人の功績について手放しに称賛している節もあるが、彼女は樺太社会の構成をよく捉えていた。だからこそ日本人だけでなく、アイヌやそのルーツをもつ人々、朝鮮人の移民労働者をも主人公にしてそれぞれの短編を練り上げているのである。

*

上記のとおり、『夜雨のささやき』の各短編で中心人物となるのは、日本人、アイヌ、朝鮮人であり、さらにそれらのほとんどが一般市民である。彼らは架空のキャラクターであるうえに、歴史には名を残さないような地位の人々であるが、たしかに樺太という社会のなかで生き、その社会を形成していた無名の人々がいたということを思い起こさせる。そして彼らにはいつでも理不尽や困難がつきまとう。自分本位の権力者、重労働、嫁ぎ先での義両親や夫との関係性などによって、それぞれの登場人物は日々苦労を重ねている。いくつかの短編では、それらの理不尽や困難を自己責任としたり、それらを受け入れることを強いたりするようなどころもある。例えば、「叶った夢と叶わなかった夢」では、嫁ぎ先で重労働と夫の無関心に見舞われるシズカに対して、義母は「息子があなたに冷たいのは、あなたが何か悪いことをしているからよ」⁵⁾と言うし、逃げ帰った実家に迎えに来た夫は怒りの表情を浮かべており、シズカ自身もこの帰省行為は罪や恥として認識し始める。最終的にシズカは納得して嫁ぎ先に戻るのが、これには違和感を覚える人も少なくないだろう。同時に、常にこのような人々が存在して、樺太社会が形成されてきた可能性を想起させるのだ。

サハリン島には、その領土を手にしたロシア人や日本人だけでなく、アイヌ、ニヴフ、ウィルタ、ナナイ、エヴェンキなどの先住民や、ヨーロッパからの移住者、朝鮮など大陸からの移民が暮らししてきた。そのため、サハリンを舞台にした文学作品においても、多様な出自をもつ登場人物が描かれてきた。朝鮮系ロシア語作家のアナトーリー・キムやニヴフの作家のウラジーミル・サンギなど、自らのルーツに関連のある作品を生み出した作家もいるが、ロシア文学においてサハリンに暮らす

3) Безбах Л. Как я создавала “Губернаторство”

[http://samlib.ru/b/bezbah_l_s/gubernatorstvo4.shtml] (2024/6/30 閲覧).

4) ИА PrimaMedia. Любовь Безбах: о самодостаточном Сахалине и триумфе на Премии Арсеньева

[<https://primamedia.ru/news/1210118/>] (2024/6/30 閲覧).

5) Безбах Л. Мечты сбывшиеся и несбывшиеся // Шёпот ночного дождя. Ridero., 2023. С.97.

少数民族が描かれるとき、彼らの表象はロシアもしくはソ連にとって都合よく利用されることがほとんどであった。例えばチェーホフは『サハリン島』(1895)で、アイヌやギリヤーク(ニヴフ)ら「未開人」の衛生環境の悪さや衛生概念の欠如を指摘している。1930年代のサハリンの文学では、先住民族たちは最も正当な「登場人物」として描かれており、彼らは「伝統」「未開」と結びつけられ、原始時代から封建制・資本主義を経ないで直接に社会主義に至るものとしてしばしば期待されたという⁶⁾。また、オレシ・ドンチェンコ『カラフト』(1940)には、主人公のソ連の少年に対してアイヌが、日本人に虐げられていることを訴える場面がある。だが、『夜雨のささやき』は、これまでのサハリン関連文学における少数民族の描き方とは一線を画しているところがある。顕著な例として、コタンの長であるシリコロは、日本人探検家であるシマについて、娘の結婚相手としてはふさわしくないと考える。「お前は長老の娘で、彼はただの日本人なんだ」⁷⁾とシリコロは娘に言う。また、「ロシア人の秩序も日本人の秩序も不満足なものだった」⁸⁾と語るシリコロをはじめとしたアイヌたちは、自分たちの地で自分たちの生活を営み、日本政府の政策によってそれが不可能になると、自らどこかへ移ったのである。

ベズバフ自身はソ連末期からロシア連邦へといたる現代のロシア社会で生活してきたのであり、彼女が日本人や朝鮮人やアイヌを描き出すことは、彼らを「ロシア」のことはや視点で書き換えることと紙一重でもある。サハリン・樺太を描いた従来のロシア文学作品が先住民や移民の表象を都合よく利用しがちであったのに比べて、『夜雨のささやき』は日本政府にもソ連政府にも支配されない彼らの意志を描くなど、かなりの配慮と工夫を伴って創作されたと考えられるが、それでもロシアの作家が朝鮮人やアイヌらを描き出すこと、それが彼らを書き換えるかもしれないことに対して、作者なりの葛藤があったのではないだろうか。ロシア(ソ連)や日本が先住民や移民を含む周辺の諸民族に対していわば支配的な側面も持ってきたなかで、先住民や移民にとって、いわば他者であり支配者である側の人間が改めて彼らについて語ることに、当然ながら限界がある。一方で作品によって、このような「語る」ことの限界や困難も共有されていくのである。

*

19世紀から20世紀、サハリンは幾度かの国境変動を経た。『夜雨のささやき』は、日露戦争後のポーツマス条約にてサハリンの南半分が日本領となり、日ソ戦で日本領にソ連軍が侵攻するまでの時代を描いている。この時代は、サハリン全島がロシア領、サハリン南部が日本領、サハリン全島がソ連領(1945年の「樺太の戦い」の後)となった期間である。こういった国境変動に人々は翻弄され、一方で新たな生活を営んできた。国境変動をくりかえした樺太の歴史は、故郷の獲得と喪失の歴史であったともいえるだろう。国語辞典において故郷は「生まれ育った土地」などと定義されており、以下に見るように『夜雨のささやき』に見られる故郷についてもおおそ同義であると考えられる。より詳しく論じるためには故郷という語をさらに詳細に定義・分類したり、樺太と故郷の結びつきやその変遷について提示したりする必要があるが、いずれにしろそれぞれの登場人物や

6) 越野剛「二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島」(原暉之編著『日露戦争とサハリン島』所収) 北海道大学出版会、2011年、146頁。

7) Безбах Л. Шёпот ночного дождя. // Шёпот ночного дождя. С.31.

8) Безбах Л. Шёпот ночного дождя. С.35.

時代にとっての故郷の存在が、この作品の鍵となっている。

1編目の「イサミの聖なる仕事」では、日露戦争の樺太の戦いのために来島したイサミが、ロシア軍と戦う物語であるが、そのなかで彼は故郷に帰ることを前提としている。旗本家の一人息子である彼は、戦闘の最中に銃弾に倒れても、「一家でただ一人の息子であり、父と母の支えであり、家に帰らなければならない」⁹⁾のである。ここでは、樺太はあくまで赴任地であり、イサミは日本のどこかに故郷、帰るべき家があることがわかる。かわって9編目の「豊原最後の日々」では、樺太こそが故郷になっている様子が見られる。和田家の次男イブラは、ソ連軍の豊原進駐に際して、軍組織に自らの参戦を直談判するも断られてしまい、「生まれ育った土地を守る機会を奪われた」¹⁰⁾と感じる。樺太で生まれ育ったイブラにとっては、樺太こそが故郷なのである。このように最初と最後の短編を見比べたとき、『夜雨のささやき』は樺太が故郷となるまでの物語ともいえるかもしれない。無論、その故郷は最後に奪われる。また、樺太が誰かの故郷であるために、もしくは故郷となりうる樺太を形成したり維持したりするために、自身の故郷から離れざるをえなかった人たちもいる。「募集」によって朝鮮の村から樺太の太平炭鉱に渡り、過酷な労働を強いられたシン・ギ・チュルら朝鮮人労働者を描いた「黒いあな」は、これをよく表した作品といえるだろう。

また、樺太のなかの、さらに自分が生まれ育った村や集落を故郷もしくは帰る場所と捉える人々も描かれている。例えば、「夜雨のささやき」のトゥレシュマツトである。商人である服部に誘拐されたのち乱暴に扱われ、シマに助けられた彼女は、回復してからもとのコタンに戻ろうとする。だが、コタンはすっかりなくなっていた。トゥレシュマツトはコタンの他に行くところがないと考えているが、シリコロたちはすでにどこかへ引き払っていた。また、「叶った夢と叶わなかった夢」のシズカも、実家の落合村に逃げ帰るが、栄浜に嫁いだ彼女にとって、そこにはもう居場所はなかったのである。このように、この作品における故郷には、村や集落、家、もしくは自分の居場所というさまざまな意味が含まれていると考えられる。そして、それらの集合が樺太なのである。

上記のように、樺太は多くの登場人物にとって故郷となっていくが、さらに重要なのは、この島が作家にとっての故郷でもあるということである。前述のとおり、ベズバフはサハリン生まれ・サハリン育ちの作家である。彼女が描いた登場人物たちの故郷は、彼女の故郷になった。樺太から引き揚げてきた経験をもつ李恢成は『サハリンへの旅』（講談社文芸文庫、1989）で、「かの地（※筆者注：ここでは真岡、現ホルムスクを指す）はソ連人にとってもやはり「生れ故郷」となっているわけで、否応なしにここには歴史の同一性が存在している」¹¹⁾であり、「「故郷」は各国人が共有できるものであった方がよい」とした¹²⁾。さまざまな人の故郷となってきたこの島を、ベズバフ自身も故郷としており、そこに李の言うような「歴史の同一性」を見出せるのではないか。故郷であるサハリンについて語ろうとしたとき、そこには樺太時代も含まれているのである。

*

『夜雨のささやき』を読解したり分析したりするにあたっては、本作品の原型と考えられる『樺太庁』の内容も検討しなければならない。無論、『夜雨のささやき』のみでも十分に示唆のあるものと

9) Безбах Л. Священный долг Исами. // Шёпот ночного дождя. С.17.

10) Безбах Л. Последние дни Тоёхары // Шёпот ночного дождя. С.176-177.

11) 李恢成『サハリンへの旅』講談社文芸文庫、1989年、25頁。

なっており、一読者としても樺太時代に思いを馳せながら作品を楽しむことができるが、作品の分析をするにあたっては、より詳細に描かれている『樺太庁』を参照しなければ、人物のつながりが不明確になってしまう部分がある。「豊原最後の日々」をはじめとしてカズキとイブラの役割が入れ替わっているなど、『樺太庁』と『夜雨のささやき』で異なっている部分もあるが、それも含めて双方を比較する必要があるだろう。

また、近年の文学作品の潮流やそれとの関連性にも目を向けたい。ロシア文学において、サハリンを舞台にした文学作品は限られており、樺太もしくは樺太時代の遺構を作品に取り込んだものはさらに少ない。一方で近年、エドゥアルド・ヴェルキン『サハリン島』(2018、邦訳2020)という、サハリンを日本領樺太として想起するような小説も発表された。この小説は近未来を舞台としたいわば架空の世界であり、過去の樺太時代を忠実に描く『夜雨のささやき』とは異なる。しかし、樺太時代からかなりの時を経た現代において、ロシア文学のなかで樺太が描かれたり想起されたりすることには、何らかの意味や共通性があるはずである。また、日本においても、明治時代から第二次世界大戦にいたるまでの北海道とサハリン島を描いた、川越宗一『熱源』(文藝春秋、2020)が発表された。川越はあるインタビューにて「僕自身は故郷の日本に住んでいて、自分がどこから出て来たんだという意味でのアイデンティティーに悩むことはない。一方で、そういうものがあらかじめ準備されていない人たちも世の中にはいっぱいいる」¹²⁾としており、この作品との比較も、樺太と故郷もしくはそれに伴うアイデンティティーについての示唆を与えてくれるかもしれない。

樺太時代からかなりの時間が経ち、その時代を過ごした経験のある人も少なくなってきた。一方で近年、樺太についての文学作品が生まれ、受賞するなど一定の社会的評価を受けていることから、樺太への関心は消えてはいないはずである。またその作品によって、新たな関心を引き起こす可能性も十分にあるだろう。現代においてあらためて樺太が描かれ、そしてそれが読まれることによって、これまであまり目を向けられてこなかった出来事や人々の存在にも気づくことができるかもしれない。そういった意味でも、『夜雨のささやき』は注目すべき作品である。

参考文献

Безбах Л. Шёпот ночного дождя. Ridero., 2023.

Безбах Л. Как я создавала “Губернаторство”

[http://samlib.ru/b/bezbah_l_s/gubernatorstvo4.shtml] (2024/6/30 閲覧).

Глушков А. Холмчанка Любовь Безбах стала победителем третьего сезона общероссийской литературной премии «Дальний Восток»

[<https://kholmsk.info/news/society/2021-12-30/holmchanka-lyubov-bezbah-stala-pobeditelem-tretiego-sezona-obscherossiyskoy-literaturnoy-premii-dalний-vostok-327483>] (2024/6/30 閲覧).

ИА PrimaMedia. Любовь Безбах: о самодостаточном Сахалине и триумфе на Премии Арсеньева

[<https://primamedia.ru/news/1210118/>] (2024/6/30 閲覧).

川越宗一『熱源』文春文庫、2022年。

『好書好日』「川越宗一さん「熱源」インタビュー 「文明」の理不尽さにさらされる若者たち、生き

12) 『好書好日』「川越宗一さん「熱源」インタビュー 「文明」の理不尽さにさらされる若者たち、生きる源は」

[<https://book.asahi.com/article/12727947>] (2024/6/30 閲覧)。

る源は」

[<https://book.asahi.com/article/12727947>] (2024/6/30 閲覧)。

越野剛「二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島」(原暉之編著『日露戦争とサハリン島』所収)北海道大学出版会、2011年、129-155頁。

李恢成『サハリンへの旅』講談社文芸文庫、1989年。